

ホンモロコ種苗生産における「ほっとけ飼育」の応用

太田 滋規

◆背景・目的

ホンモロコの資源を回復させるため、種苗放流が行われているが、漁獲されるホンモロコは魚体が小さいため、1尾あたりの単価が安く、低コストの種苗生産が望まれている。ヒラメ種苗生産において、省力化や作業時間の短縮を目的として、高濃度の植物プランクトンによる水作りを行い、長期の止水条件下でシオミズツボワムシ培養とヒラメ仔魚飼育を同時に行ういわゆる「ほっとけ飼育」が知られている。これをホンモロコ種苗生産に応用するため、ホンモロコがツボワムシを必要とするふ化後14日までの最適クロレラ濃度の検討を行った。

◆成果の内容・特徴

●ホンモロコのほっとけ飼育にあたっては、クロレラ濃度250万cells/mlを保てば、ホンモロコを20尾/1の密度で収容した場合、14日間ワムシを維持することができ、ホンモロコを高い生残率で飼育することが可能であった。

◆成果の活用・留意点

●止水飼育であるため全アンモニア態窒素の増加が起こるため、クロレラの炭酸同化作用によるpHの上昇を押さえる必要があり、遮光が必要と思われた。特にワムシ減少後はクロレラ濃度が上昇しないように注意が必要である。

